

編集後記

『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八）十一月一日に、藤原公任が「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ」と日記の作者を探し求めた記事がある。これが『源氏物語』にふれた最も古い記録であり、昨二〇〇八年は「源氏物語千年紀」として、様々なかたちで『源氏物語』がとりあげられた。本学でも、二〇〇七年にブレ千年紀として「源氏カンタービレ 女楽」（日本語日本文学科）が、二〇〇八年には「源氏物語の、一〇〇〇年。平安時代のみやびを慕う」（文化創造学科）が、『源氏物語』をテーマにして秋桜祭に参加した。

『源氏物語』が、千年という時を読み継がれてきたことは、とりもなおさず、それだけ多くの人々がこの物語に触れてきた証でもある。たとえ一部分であっても、これまでにどれほどの人に読まれてきたのか、そう思うと、捉えどころのない茫漠とした感覚を味わう。それぞれの時代には、現代の読者にも指針を示してくれるすぐれた読み手がいるのと同時に、名も明らかではない多くの読者が存在したのである。数多くの人が触れることによって『源氏物語』は現在まで伝えられたと言っていよい。

ところで、昨年はもうひとつ、四人の日本人がノーベル賞を受賞したという大きな話題があった。益川敏英・小林誠両氏の研究は、素粒子物理学の基礎となる理論を構築したということであるが、もともと仮説として提唱された理論が証明されての受賞だという。下村脩氏はオワンクラゲがどうして光るのかを解明したのだが、発見当時はそれが何に役立つのかわからなかったという。今、理論は証明され、光る原理は活用されている。

しかし、この二つの研究は、初めは、かたや仮説、かたや使い途のわからない発見という、実用とはかけ離れた研究であったことが共通している。実用的か否か、成果がすぐに役に立つのか立たないのか、という次元とは異なる、結果を時間にゆだねた大らかさが共通している。

流れてゆく時間の中で日本語は変化を繰り返して現在に至っている。古典や近代の文学作品も、時間の中で選ばれてゆく。研究者として言語や文学作品に向かう時、時間という篩があることをいつも忘れないようにしたいと思うのである。

（KY）

編集委員 茅場 康雄
山田 潔
久下 裕利

学苑 八百十九号

定価 八四〇円（本体八〇〇円）

購読料 一カ年分 一〇〇八〇円

（本体 九六〇〇円）

平成二十年十二月二十日 印刷

平成二十一年一月一日 発行

編集発行人 竹 田 喜美子

印刷所 三 秀 舎

発行所 昭和女子大学

近代文化研究所

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂一ノ七

電話 03（三四一）五三〇〇

☆掲載論文の無断転載を禁じます。